

青年海外協力隊員レポート

平成15年から青年海外協力隊員の村落開発普及員として、セネガルで活躍されていた池永伊奈生さんが2年間の派遣期間を終え、4月に帰国されました。

派遣国での体験と感想をご紹介します。

セネガル・レポート

池永伊奈生（筒井）

松前町の中心で、セネガルを語る①

私が2年ぶりに松前町に帰ってきたのは、今年の4月で、まだ昼間も少し肌寒いころでした。

筒井の実家の裏にはまだたくさん田んぼが残っていて、その一面に菜の花が咲き、穏やかな日差しの中でさわやかな風に揺れていました。

松前町ならどこでも、視線を上げれば真っ青な青空に、遠く石鎚連峰の稜線と、そしてこの街の経済を支える大きな工場の高い煙突が、真っ白な煙をモクモクと吐き出しているのを見えます。

国道沿いは家よりも田んぼの方が多いのですが、旧道沿いになると、箱入り石鹸のようにきちきちと家が詰められており、大きな乗用車が隙間を縫うように走っています。一車線で、のんびり歩いているおばあち

やんを追い抜きながら、器用なものです。

子どものころは、6段ギアの自転車です。町中を走りながら、きつと世界は、大体どこでも、こんなもんだと思っていたような気がします。

私が青年海外協力隊の隊員として派遣されたアフリカー「セネガル共和国」以下、セネガル」は「行く前には覚悟していましたが―覚悟していた通りの、想像をはるかに超える世界だったわけです。

セネガルには奇しくも、松前町出身の方が私よりも9か月先に派遣されており、その方も広報まさきにてレポートをお書きになっています。その中でセネガルの基本的なデータ（地理、気候、民族、宗教など）は詳

しく解説されているので、ここでは、それらの説明は最小限に留め、いくつかの点について、よもやまなお話をさせていただきますと思います。

○セネガルの気候

セネガルはアフリカ大陸の（地図で言えば左上）最も西に位置し、大西洋に面しています。北緯15度でフィリピン首都マニラと同じくらいで、面積は日本の約半分です。全くの砂漠ではありませんが、基本的にこの地面も砂で、乾季には、膝くらいまでの高さの、硬く乾いた草（の茎？）が、砂の大地を一面に覆っています。暑いのは言うまでもありません。12月～2月の最も寒い（涼しい!）時期でも、日中は30度を超えることがしばしばで、乾季の最も暑い時期は、40度を超えます。

しかしながら、人間の環境適応能力とは大したもので、来た直後はセネガルの暑さにへばっていても、1年も経つと体調を壊さない程度には慣れます。寒い時期の夜から明け方は気温が20度近くまで下がりますが、現地の人々がダウンジャケットを着込んでいるのはもちろん、隊員の中でさえも「寒い!」と毛布をかぶって丸くなっている人がいます。

○セネガルの人

国民の大半がブータン系ウオロフ族という民族で、黒人です。一言で「黒人」と言っても、肌の黒さには差がありますが、ウオロフ族はかなり黒い方と言えるでしょう。かつてフ

ランスの植民地だったため、公用語はフランス語ですが、ウオロフ語の影響力が強く、農村部ではフランス語がほとんど通じません。



国民のほぼ9割がイスラム教で、どんな僻地のどんな小さな村にもモスク（イスラム教のお堂）か、その変わりになるものがあります。キリスト教徒も少数ですがいます。たいていは大きな町に住むか、一つの村に集まって暮らしています。集まって暮らしている、と言っても、特に宗教的な迫害や差別があるわけではなく、そこに教会があるとか、おそらくは利便性のことを考えてのことだと思えます。